理１号館地区再開発による理学部の活性化を

上　村　　洸　（物理学教室）

最近（昭和61年９月）物理学教室では，老朽化した理１号館を改修する代りに，これを建て替えて高層化し，理３号館と５号館とも一緒になって，理学部を１号館地区（新１号館，４号館，化学棟，Ｄ棟）と２号館地区に集中化する再編成案を考え，理学部企画委員会建物小委員会にこの案についての検討をお願いしている。*

この理学部セントラリゼーションが行われたとすると，以下のようなメリットが考えられよう。

(1) これからの学問は，既成の分野の中での発展のみならず，それぞれの学問分野がお互いに強く相互作用しながら発展する傾向にある。理学部のセントラリゼーションは，このような学問の相互作用の場として，ひいては学問自体の発展の場として大いに役立つことであろう。

(2) 最近は，実験装置の多様化や大型化，さらには膨大なデータの処理の必要性のために実験の研究室は大きなスペースを必要としているが，理論の研究室も，各研究者がそれぞれパーソナル・コンピューターを使って研究を行うと云うように研究の様式が変って大きなスペースを必要とするよ

＊校正時追記：12月の教授会でこの案が認められ，具体案つくりのためのワーキング・グループが発足した。

うになり，従来の講座あたりの基準面積が実情にそぐわなくなりつつある。丁度自家用車の台数の急激な増加を予想しなかった今日の都内の道路事情に似てハイテク機器でどの研究室も満杯の状態に近づきつつある。丁度このような研究環境の転換期に，これからの研究方法の発展の方向を予想して，インテリジェンス・ビルディング的な特徴をもった新しい理1号館を設計し，建て直すことは，大変良いタイミングと云えよう。

(3) 理1号館地区のセントラリゼーションができた暁には，理5号館，3号館の跡地を活用化することができ，現在立錐の余地もない本郷地区の再開発にも役立てることができよう。

幸いにして，現在の理学部1号館地区は既に地下1階まで堀ってあるので，この敷地に高層ビルを建てるのであれば，現在東大が直面している遺跡問題の影響もさほどないことが期待される。Science と同様，新らしいものを創ることには，我々の限りない夢がある。どうか我々の英知を結集し，大所高所から理学部が一丸となって，後世に残る素晴らしい建物を建てようではありませんか。

最後にもう一言。今日，日本の科学・技術の水準は世界で非常に高い評価を得ている。このような科学・技術の発展に対しては，当理学系をはじめ我が国の理学系の修士・博士課程修了者並びに学部卒業者の優秀な man power による寄与が極めて大きい。今後とも日本の科学・技術の水準を発展させていくためには，当理学部並びに理学系大学院から，引続き優秀な人材を多数社会に送り出していくことが必要で，そのためにも当理学部における研究の一層の充実を図っていかねばならない。

理学部1号館の建て替えが，これからの理学部の研究・教育の発展の活力になることを切に願っている。